

ピア・カウンセリング体験と実習や職業への有用性

石川 洋子*・井上 清子**

The Usefulness of Peer Counseling in Education and Childcare Training

Hiroko ISHIKAWA, Kiyoko INOUE

要旨 文教大学教育学部心理教育課程の1年生109名に対して、同課程の3・4年生57名が、1年次の必修科目である「カウンセリング」の授業の一コマを使って、個人面接による20分間のピア・カウンセリングを行った。また、ピア・カウンセラーとしてのピア・カウンセリング体験の有無による大学生活や実習、職業への有用性の意識を探るために3年生全体の57名に調査を実施した。

ピア・カウンセリング後は、下級生、上級生共に、自身や職業への有用意識が高まっていた。とくに上級生において、自分がピア・カウンセリングを行った下級生のPOMS得点の採点や感想を読んだ後で、自信を高めていた。気分変化を測定するためのPOMS短縮版での総合感情障害(TMD)の得点でも、下級生、上級生双方でピア・カウンセリング後にTMDの平均値が有意に低くなっていた。

3年生全体の調査では、実習などで人間関係などで困ったことが「かなり・多少あった」者が57.9%おり、一番困っている内容が、先生と接する場合のものであった。3年次でのピア・カウンセラー体験の有無により、実習、職業などへの有用性の意識に違いがあるかをみたところ、体験の有る者に有意に、心理学への興味や「自身の役に立つ」「実習やボランティアなどでカウンセリングのスキルが役立った」「職業に役立つ」、自分が1年次に体験したピア・カウンセリング体験が「役立った」と答えていた。カウンセリングが自分自身に役立つ理由では、「相手のためになる」という記述も見られ、相手を尊重し、相手に沿った対応を考え、それができるようになるためにも、ピア・カウンセラーとなる体験の意義が示されていた。

キーワード: ピア・カウンセリング ピア・カウンセラー 大学 教員養成 保育士養成

I 研究目的

仲間による対人関係を利用した相談活動に視点を当てたピア・カウンセリング、ピア・サポートの重要性が認識され、実践が重ねられてきている。とくに、サポートを受ける新入生だけではなく、サポートする側やピア・カウンセラーに焦点をあてた研究が多くなっている。

中出¹⁾は、ピア・サポーター養成プログラムを作成し実践する中で、ピア・サポーター養成が

有意義であること、プログラムはコミュニケーションスキルを中心に行うが、ピア・サポーターのセルフエスティームを高めるプログラムを組むことが効果的であることを述べている。

加藤等²⁾は、ピア・カウンセリング養成講座前期課程に参加した学生が、自分に満足し、前向きな態度であることを見出し「笑顔」へ変化したことから自尊感情を高める効果があることを示唆している。また、自己効力感の変化には性差があることなどを報告している。

山田³⁾は、各大学におけるピア・サポート活動の教育的効果を分析し、サポーターへの訓練・トレーニングが重要であることを指摘している。

* いしかわ ひろこ 文教大学教育学部心理教育課程

** いのうえ きよこ 文教大学教育学部心理教育課程

青山・長澤等⁴⁾は、新入生セミナーでのピア・サポート活動の中で、学生スタッフは、自己成長への喜び、活動意欲の高まり、仲間への感謝を感想として記述している。

石川等⁵⁾はピア・カウンセリング体験の調査から、上級生へのピア・カウンセリング体験後の効果をフードバックすることで上級生に、より効果があることを報告した。

井上等⁶⁾は、大学で学んだカウンセリングの卒業生の職業生活における有効性を検討し、とくに保護者対応における有効性を確認している。

筆者等は、一連の研究の中で、上級生と下級生によるピア・カウンセリング体験の下級生のメンタルヘルスや大学生活を支える一助となり得る可能性や上級生にとっての自信などの効果、卒業生の保護者対応における有用性などを確認した。

一方、上級生にとって、卒業後よりよい教育者、保育者となるための現場体験の1つに実習がある。よい職業人となるためにも、この実習をどう生かしていくかは重要である。そこにピア・カウンセリング体験が有効であれば、より実のある学生支援が考えられることになる。そこで、上級生としてピア・カウンセラー役でのピア・カウンセリング体験の有無による実習や職業への効果を検討するために、ピア・カウンセラー役の体験をしていない者も含んだ3年生全体への調査を行うことを企図した。

II 研究方法

1 対象

調査は、ピア・カウンセラーとしてのピア・カウンセリング体験の有無による大学生活や実習、職業への有用性の意識を探るために、以下の2つを柱として調査を実施した。それぞれの調査対象は以下のとおりである。

A 上級生と下級生によるピア・カウンセリング体験

下級生は、文教大学教育学部心理教育課程の必修科目「カウンセリング」を受講している1年生109名（男子20.2%、女子79.8%）、上級生は、「カ

ウンセリング」の授業を履修し、さらに選択科目である「心理アセスメント実習」を受講している3・4年生57名（男子8.8%、女子91.2%）である。

B 上級生のピア・カウンセラー体験の有無と実習、職業への有用性の意識

上級生は、同課程在籍の3年生57名（男子8.8%、女子91.2%）である。このうち、3年次に、下級生に対してカウンセラー役でのピア・カウンセリング体験をした者は、57.9%（男子0%、女子100.0%）、体験しなかった者は、42.1%（男子8.3%、女子91.7%）である。

2 実施時期

A 上級生と下級生によるピア・カウンセリング体験
実施時期は、2013年11月。「カウンセリング」の授業一コマ（90分）を使って行った。欠席者については、学生間の調整をした上で、別途行った。

B 上級生のピア・カウンセラー体験の有無と実習、職業への有用性の意識

2014年1月に質問紙調査を実施した。

3 手順

A 上級生と下級生によるピア・カウンセリング体験
担当教員がピア・カウンセリング体験の実施日に、クライアントとピア・カウンセラーの組み合わせ等の詳細を説明した。1人のピア・カウンセラーが2人程度のクライアントを担当、1回の面接時間は20分とし、時間の管理はピア・カウンセラーが行った。

クライアントおよびピア・カウンセラーのカウンセリングと調査の概要は以下の通りである。

①クライアント（下級生、1年生）

i 事前に質問紙とPOMS短縮版に回答。

ii カウンセリング体験。

iii 体験後、事後の質問紙とPOMS短縮版に回答。

②ピア・カウンセラー（上級生、3・4年生）

i 事前に質問紙とPOMS短縮版に回答。

- ii カウンセリング体験.
 - iii 体験後、事後の質問紙と POMS 短縮版に回答.
 - iv 担当した1年生の POMS 短縮版を採点し、その感想（差支えない範囲）を読み、その後、採点後の質問紙に回答.
- B 上級生のピア・カウンセラー体験の有無と実習、職業への有用性の意識
- 担当者の授業時に、質問紙を配布、その場で記入してもらい回収した.

4 質問紙等の内容

A 上級生と下級生によるピア・カウンセリング体験

(1) 質問紙

①クライアント（1年生）

i 体験前質問紙

「カウンセリングに興味があるか」など3項目に、「全くない」（1点）から「かなりある」（5点）の5件法で、また、「20分の面接時間」の質問に「とても長い」（1点）から「とても短い」（5点）の5件法で回答を求めた.

ii 体験後の質問紙

「カウンセリングに興味があるか」など5項目に、5件法で回答を求め、その理由について記載を求めた. また、「20分の面接時間」についても、5件法で回答を求め、何分位がいいか記入してもらった. さらに、全体の感想の記入も求めた.

②ピア・カウンセラー（3・4年生）

i 体験前質問紙

「カウンセリングに興味があるか」「カウンセラーとしての自分に自信はあるか」など4項目に、5件法で回答を求めた. また、「20分の面接時間」の質問に5件法で回答を求めた.

ii 体験後の質問紙

「カウンセリングに興味があるか」「カウンセラーとしての自分に自信が持てたか」など6項目に5件法で回答を求め、その理由について記載を求めた. また、「20分の面接時間」についても5

件法で回答を求め、何分位がいいか記入してもらった. さらに、全体の感想の記入も求めた.

iii 採点終了後の質問紙

自分がカウンセリングを行った下級生の POMS の採点後や差支えない範囲での感想を読んだ後に、再度、質問紙調査を行った. 「カウンセリングに興味があるか」など5項目に5件法で回答を求め、その理由について記載を求めた. さらに、全体の感想の記入も求めた.

(2) POMS 短縮版

気分を測定する日本語版 POMS (Profile of Mood States) 短縮版（以下 POMS 短縮版と記す）に「まったくない」（0点）から「非常に多くある」（4点）の5件法で回答を求めた. 実施は、クライアント、ピア・カウンセラー共に、体験前と体験後の2回行った.

B 上級生のピア・カウンセラー体験の有無と実習、職業への有用性の意識

ピア・カウンセリング体験の有無やそれまでのボランティアや実習体験、心理系の選択授業の受講の有無についてと、「実習などにおいて人間関係などで困ったことがあったか」「カウンセリングのスキルが役に立ったか」「ピア・カウンセリング体験は役に立ったか」など9項目に5件法で回答を求め、その理由について記載を求めた.

III 結果と考察

A 上級生と下級生によるピア・カウンセリング体験

1 ピア・カウンセリングへの評価

(1) カウンセリングへの興味

ピア・カウンセリングを行う前に、カウンセリング自体への興味を尋ねた結果が表1である. 下級生と上級生の得点の平均値のt検定を行ったが、上級生の方に事前の興味が高い結果であった（表1 $p < .01$ ）.

表1 カウンセリングへの興味(下級生・上級生・事前)

	平均値	N	SD	t 値	
下級生	4.02	108	.749	-2.726	**
上級生	4.35	55	.673		

** p < .01

(2) ピア・カウンセリング体験後の評価

前述の結果で、下級生では、事前のカウンセリングへの興味は上級生よりも低かったが、ピア・カウンセリング後には異なるものとなっていた。表2で、下級生のピア・カウンセリング前後の得点の差をみると、平均値のt検定で、「興味」「自身に役立つ」「職業に役立つ」のいずれの項目でもピアカウンセリング後の方が有意に高くなっていた(表2 $p < .001$ $p < .05$)。ピア・カウンセリングを行ったことで、カウンセリングへの評価が高まっている。実際に体験することにより、評価に変化があったと言える。

表2 カウンセリングへの評価(下級生・事前・事後)

	平均値	N	SD	t 値	
事前興味	4.05	105	.699	-6.512	***
事後興味	4.45	105	.635		
事前自身に役立つ	4.20	108	.638	-6.583	***
事後自身に役立つ	4.65	108	.535		
事前職業に役立つ	4.63	108	.540	-2.536	*
事後職業に役立つ	4.76	108	.509		

*** p < .001 * p < .05

本研究でのピア・カウンセリングの面接時間は20分であったが、その時間に対する下級生、上級生の意識の変化をみたものが表3である。「とても長い」(1点)から「とても短い」(5点)の5件法で、下級生、上級生共に、ピア・カウンセリング体験前より体験後の方が平均値のt検定で有意に面接時間が短かったと回答している(表3 $p < .001$)。

また、ピア・カウンセリング後に尋ねた望ましい面接時間の長さは、下級生、上級生共に25分程度となっていた(表4)。ここからも面接後には、ピア・カウンセリングへの評価が高まっていると言える。

表3 面接時間への意識の変化(下級生・上級生・事前・事後)

	平均値	N	SD	t 値	
下級生・事前	2.40	109	.595	-12.503	***
下級生・事後	3.49	109	.728		
上級生・事前	2.71	55	.712	-7.329	***
上級生・事後	3.58	55	.762		***

p < .001

表4 望ましい面接時間(下級生・上級生・事後)

	平均値	N	SD	t 値
下級生	25.24	63	5.849	
上級生	25.46	54	6.886	

(3) 上級生のピア・カウンセリングへの評価

ピア・カウンセリングへの評価を上級生を中心にみたものが次表からのものである。表5は、ピア・カウンセリング後に、下級生、上級生の双方に、相手と気持ちよくコミュニケーションが取れたかどうかを尋ねたものである。下級生、上級生でその得点の平均値の差をみると、t検定で、下級生に有意に高くなっていた(表5 $p < .001$)。

下級生の方が、コミュニケーションが気持ちよく「とてもできた」と答えており、上級生はやや自信を持ってないでいる結果である。

表5 コミュニケーションが取れたか(下級生・上級生・事後)

	平均値	N	SD	t 値	
下級生	4.77	109	.422	8.653	***
上級生	4.11	55	.533		

*** p < .001

しかし上級生においても、ピア・カウンセリングを行ったことへの自身への評価は高くなっている。表6は、カウンセラーとしての自信をピア・カウンセリングの前後の平均値でみたものであるが、t検定で、ピア・カウンセリング後に有意に上がっている。(表6 $p < .001$)

また、自分がピア・カウンセリングを行った下級生のPOMS得点の採点や感想を読んだ後での自らへの自信を見たものが、表7である。平均値のt検定で、「相手の気持ちを感じ取ることがで

きた」「カウンセラーとして自信がもてた」の項目で、採点后に有意に高くなっていた（表7 $p < .001$ $p < .05$ ）。ピア・カウンセリング直後よりも相手の感想を読んだりするフィードバック後の方が、さらに自らへの自信を高くしているのがわかる。自分のピア・カウンセリングの結果や有用性をフィードバックされることが、ピア・カウンセラーにとって重要であることが言える。

表6 カウンセラーとしての自信（上級生・事前・事後）

	平均値	N	SD	t 値	
事前カウンセラーの自信	2.33	55	.771	- 8.334	***
事後カウンセラーの自信	3.36	55	.825		

*** $p < .001$

表7 採点後のカウンセラーとしての自信（上級生・事後・採点后）

	平均値	N	SD	t 値	
事後気持ち感じ取る	3.69	49	.619	- 4.054	***
採点后気持ち感じ取る	4.45	49	.621		
事後自信	3.41	49	.840	- 2.619	*
採点后自信	3.69	49	.847		

*** $p < .001$ * $p < .05$

2 POMS 得点の変化

ピア・カウンセリング前後の気分変化を測定するため、POMS 短縮版を用い、下級生（クライアント）、上級生（ピアカウンセラー）共に、体験前と体験後の2回記載してもらった。

POMS 短縮版では、緊張・不安、抑うつ、怒り・敵意、疲労、混乱の5つのnegativeな気分の合計点から、positiveな気分である活気の点数を引いたものである総合感情障害（Total Mood Disturbance, 以下TMD）の得点を算出した。TMDが高いほど、気分は悪いことになる。

表8は、下級生のピア・カウンセリング前後のTMDの平均値を算出し、t検定を行ったものであるが、実施後は実施前より、TMDは有意に低かった（ $p < .001$ ）。

表9は、上級生のピア・カウンセリング前後のTMDの平均値のt検定であるが、こちらも実施

後は実施前より、有意に低かった（ $p < .001$ ）。

ピア・カウンセリングでは、下級生、上級生共に緊張や不安は高くなると思われるが、実施後では両者共に悪い気分はなくなっている。質問紙の結果同様に、ピア・カウンセリングのよさを感じられていると言えよう。

表8 下級生のピア・カウンセリング前後でのPOMS 得点変化

	平均値	N	SD	t 値	
TMD（事前）	12.81	102	13.597	11.798	***
TMD（事後）	- 2.89	102	9.139		

*** $p < .001$

表9 上級生のピア・カウンセリング前後でのPOMS 得点変化

	平均値	N	SD	t 値	
TMD（事前）	17.98	50	17.821	8.341	***
TMD（事後）	0.66	50	11.556		

*** $p < .001$

B 上級生のピア・カウンセラー体験の有無と実習、職業への有用性の意識

1 上級生における実習やボランティア体験

ピア・カウンセラーとしてのピア・カウンセリング体験の有無による実習や職業への有用性の意識の違いを測るために、心理教育課程に在籍の3年生57名に、質問紙調査を実施した。57名のうち、その年度に、上級生として下級生に、カウンセラー役でのピア・カウンセリング体験をした者は、33名（57.9%）である。

57名中、不明の者1名を除き、全員が介護等体験や社会福祉施設体験、幼稚園実習や施設実習を体験済みである。また、小学校や幼稚園、保育所などにおいてボランティアも75.9%の者が行っている。

表10は、実習やボランティアなどにおいて人間関係などで困ったことがあったかどうかを尋ねたものである。「かなりあった」「多少あった」を合わせると、57.9%の者が困ったことがあったと答えている。

困った内容を自由記述で尋ねたところ、図1のような結果であった。子どもや高齢者と接する場合に困ったという者も多いが、一番多く記載された内容が、先生と接する場合のものであった。具体的には、「先生が冷たかった」「忙しそうで話せなかった」「先生によって個性があるので、その人に合った対応の仕方がわからなかった」「先生によって指示の内容が異なった」などである。

実習というほぼ初めての場に出て、さまざまな先生との直接的なやりとりの中、戸惑いが多いようである。大学内での友人関係やアルバイトでの人間関係とはまた異なる、教育や保育という現場体験を積むことと、そこでの動き方や接し方、話し方を知ることの重要性がうかがえる。

表10 実習などにおいて困ったこと

	体験有	体験無	合計
かなりあった	3.0	12.5	7.0
多少あった	54.5	45.8	50.9
どちらともいえない	6.1	8.3	7.0
あまりなかった	29.2	27.3	28.1
全くなかった	4.2	9.1	7.0
% (N)	100.0 (33)	100.0 (24)	100.0 (57)

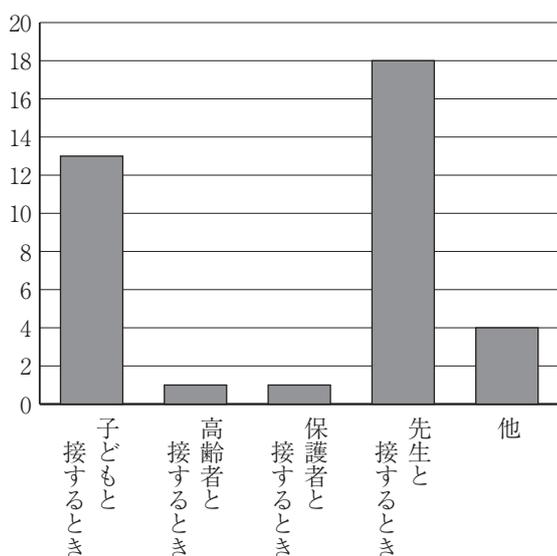


図1 実習などにおいて人間関係で困った内容 (自由記述・複数回答)

次に、実習やボランティアなどにおいて、学んだカウンセリングのスキルや知識が役立ったかどうかを尋ねたものが、表11である。全体の66.1%の者が、多少なりとも役立ったとしている。

具体的に役立った場面を自由記述で尋ねた結果が、図2である。社会福祉施設や児童養護施設などで、高齢者や障害を持つ人、さまざまなトラブルを抱えているであろう子どもと接する場合などで、カウンセリングのスキルが役立ったと答えている。また、初めて接する人とのコミュニケーションの場や傾聴や受容といったことを必要とする場でも有用であったと答えている。実習などの場では、予想以上にカウンセリングのスキルの有用性を感じている結果であった。

表11 実習などにおいてカウンセリングのスキルが役に立ったこと

	%	(N)
かなりあった	16.1	(9)
多少あった	50.0	(28)
どちらともいえない	28.6	(16)
あまりなかった	5.4	(3)
全くなかった	0	(0)
	100.0	(56)

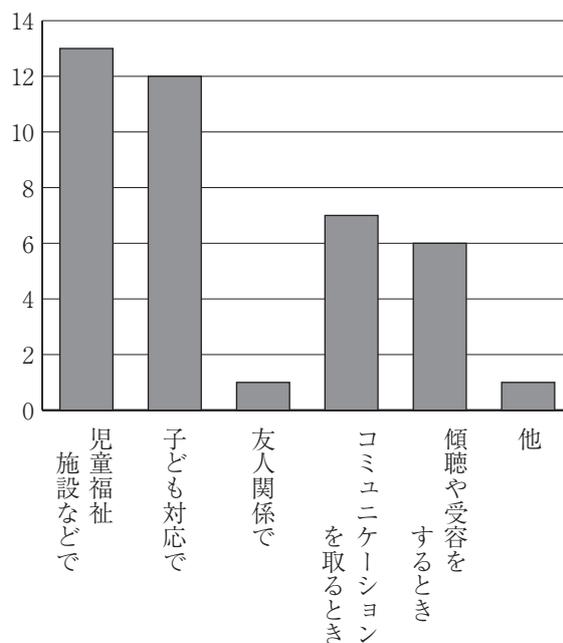


図2 カウンセリングのスキルが役立った場面 (自由記述・複数回答)

2 上級生のピア・カウンセラー体験の有無と実習、職業への有用性の意識

ピア・カウンセリング体験でピア・カウンセラーとなる上級生は、「カウンセリング」の必修授業を履修し、さらに選択科目である「心理アセスメント実習」を受講している3・4年生である。選択科目であるため、本調査対象である3年生が全員、ピア・カウンセラーとしての体験があるわけではない。そこで、3年次でのピア・カウンセリング体験の有無により、大学生活や実習、職業などへの有用性の意識に違いがあるかをみた。

表12は、3年次でのピア・カウンセリング体験の有無別に、「カウンセリングへの興味」などの項目の得点の平均値の差をみたものである。t検定で、体験の有る者に、有意に高くなっていた項目は、「カウンセリングに興味がある」「心理系の授業を多く取った」など、心理学への興味を示す項目と、「自身の役に立つ」「実習やボランティアなどでカウンセリングのスキルが役立った」「職業に役立つ」の有用性の項目である。(表12 $p < .001$ $p < .05$).

また、自分が1年次に体験したピア・カウンセリング体験が「役立った」と答えた者も、3年次でのピア・カウンセリング体験の有る者に有意に高くなっている ($p < .001$).

「実習で困ったこと」があるかどうかには、差がなかったことから、困ったことはあっても、3年次にピア・カウンセリング体験をした者には、カウンセリングのスキルへの有用性意識が高く、自身にも将来の職業にも役立つとしていることは、ピア・カウンセリング体験でのピア・カウンセラーとなる体験の重要性を示していると言えよう。

図3は、カウンセリングが自分自身に役立つ理由を自由記述で尋ねたものである。一番多くになっている回答は、「自分の考えが整理される」「自己分析ができる」「自己開示のために」「いい気分になれる」など「自分の心」に関するものであるが、「人の気持ちに寄り添うことに役立つ」「相手への

観察力や配慮を考えることができる」など「相手のためになる」という記述も見られた。

本学生は、小学校や幼稚園、保育所など教育・保育の場に身を置こうとする者が多い。相手とよいコミュニケーションを取るばかりでなく、相手を尊重し、相手に沿った対応を考え、それができるようになることは、とても重要である。ピア・カウンセリング体験における、とくにピア・カウンセラーとなる体験の意義がここにあると言えるのではないだろうか。この意義をより強調して伝えることは、実習ばかりでなく、将来の職業人となる者に向けて、大事なこととなると思われる。

表12 3年次でのピア・カウンセリング体験の有無と有用性の意識(上級生)

		平均値	N	SD	t 値
カウンセリング興味	有	4.39	33	.556	3.086 ***
	無	3.83	24	.816	
自身に役立つ	有	4.64	33	.489	2.165 *
	無	4.33	24	.565	
実習で困ったこと	有	3.15	33	1.149	-.586
	無	3.33	24	1.167	
スキル役立った	有	3.97	32	.740	2.292 *
	無	3.50	24	.780	
職業に役立つ	有	4.79	33	.415	2.345 *
	無	4.50	24	.511	
心理系授業多い	有	4.45	33	.711	6.058 ***
	無	3.13	24	.947	
1年ピア役立った	有	3.61	33	.899	2.902 ***
	無	2.88	24	.992	

*** $p < .001$ * $p < .05$

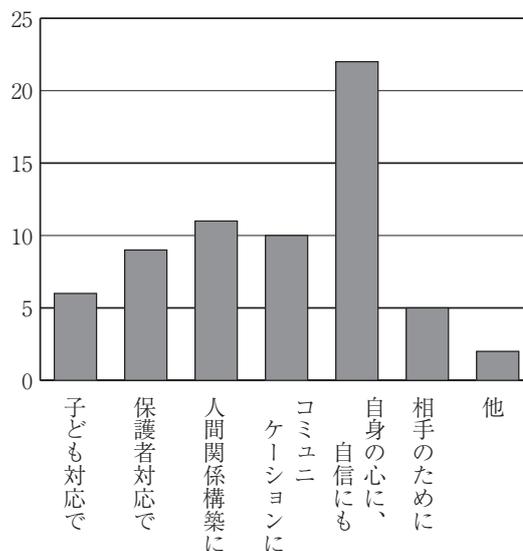


図3 カウンセリングが自分自身に役立つ理由(自由記述・複数回答)

IV まとめ

大学生におけるピア・カウンセリングの効用を測るために、クライアント（下級生）と、ピア・カウンセラー（上級生）の双方を対象として、ピア・カウンセリング体験の前後と結果の採点後に、質問紙調査とPOMS短縮版への回答を求め、検討した。さらに上級生に、3年次でのピア・カウンセラーとしてのピア・カウンセラー体験の有無により、実習や職業へのカウンセリングの有用性への意識の違いをみるために、3年生全体に、質問紙調査を行った。

調査の協力者は、下級生（1年生）109名、上級生（3・4年生）57名、また3年生全体への調査では、3年生57名である。

事前のカウンセリングへの興味は、下級生は上級生よりも低かったが、ピア・カウンセリング後では、「興味」「自身に役立つ」「職業に役立つ」のいずれの項目でも有意に高くなっていた。

相手と気持ちよくコミュニケーションが取れたかどうかを尋ねてみると、下級生の方が、コミュニケーションが気持ちよくできたと答えており、上級生はやや自信を持ってないでいる結果であった。

しかし上級生においても、ピア・カウンセリングを行ったことへの自身への評価は高まっていた。また自分がピア・カウンセリングを行った下級生のPOMS得点の採点や感想を読んだ後では、「相手の気持ちを感じ取ることができた」「カウンセラーとして自信がもてた」とさらに有意に評価が高くなっていた。自分のピア・カウンセリングの結果や有用性をフードバックされることが、ピア・カウンセラーにとって重要であることが言える。

気分変化を測定するためPOMS短縮版で測定したところ、総合感情障害（TMD）の得点は、下級生でも上級生でもピア・カウンセリング後にTMDの平均値が有意に低かった。

3年生全体の調査では、実習などで人間関係に

困ったことが「かなり・多少あった」者が57.9%いた。その内容を尋ねたところ、一番多く記載された内容が、先生と接する場合のものであった。

3年次でのピア・カウンセラーとしてのピア・カウンセリング体験の有無により、実習、職業などへの有用性の意識に違いがあるかをみたところ、体験の有る者に有意に、心理学への興味や「自身の役に立つ」「実習などでカウンセリングのスキルが役立った」「職業に役立つ」「自分が1年次に体験したピア・カウンセリング体験が役立った」と答えていた。

また、カウンセリングが自分自身に役立つ理由では、「自分の心」に関するものが多かった一方、「相手のためになる」という記述も見られた。相手とよいコミュニケーションを取るばかりでなく、相手を尊重し、相手に沿った対応を考え、それができるようになることは重要であり、ここにピア・カウンセラーとなる体験の意義が示されていると言えよう。

(参考文献)

- 1) 中出佳操「ピア・サポーター養成プログラムに関する一考察（Ⅱ）」人間福祉研究, No.5, 2002
- 2) 加藤千恵子・石川貴彦「『ピアカウンセリング養成講座』の開催で捉えた大学生の自尊感情と自己効力感」名寄市立大学道北地域研究所「地域と住民」32, 2014
- 3) 山田剛史「ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性」大学と学生 (87), 2010-11, 新聞ダイジェスト社
- 4) 青山巧・長澤郁夫他「新入生セミナーにおける学生の活用と成果—ピア・サポート活動と体験学修の高まり—」教育臨床総合研究9, 2010
- 5) 石川洋子・井上清子「上級生から下級生へのピア・カウンセリングの試みⅡ」文教大学教育学部紀要46, 2012
- 6) 井上清子・石川洋子「大学において学んだカウンセリングの就職後の有用性」文教大学教育学部紀要47, 2013